

Title	近代的歴史主義の認識構造：理解社会学の負荷理論的研究への序章
Sub Title	Die Erkenntnisstruktur des modernen Historismus : Einleitung in die tragtheoretische Untersuchung der verstehenden Soziologie
Author	松村, 宏(Matsumura, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1975
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.15 (1975.), p.1- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000015-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代的歴史主義の認識構造——理解社会学の 負荷理論的研究への序章

Die Erkenntnisstruktur des modernen Historismus——Einleitung in die
tragtheoretische Untersuchung der verstehenden Soziologie

松 村 宏
Hiroshi Matsumura

第一篇 文化科学構造論

I¹⁾ 理解社会学に自らを端整に実現した文化科学 Kulturwissenschaft はヴェーバー M. Weber の言う特殊な意味での文化人 Kulturmensch を完璧な担手 Träger とする。それは、対象と目的と主体として文化人を前提する。自分の自分による自分のための科学である。従って担手が正に如何に担い「負荷」するかは、認識手法の裡に能く探求し得ると思う。本稿の論述は文化科学方法論の世界に内在的に沈潜して其の手法の特質と構造を幾つか取挙げて定式化する地味な作業に大半（特に前段では）費やされる。これ自体意味あると信ずるが、更にこの定式化作業の上に初めてヴェーバーに迫る解釈上の見解提起の資格ができるのではないか。²⁾ 孤独な作業として零から始めて敷き上げるのは学界の水準に及ぶ迄の時間はかかるが、極めて固有な突出が確保されるのではないか。³⁾ 本稿がその行程のどこに立つかは知らない。今、作業の一塊を捉し若し有るとすれば自らの解釈観点を漸次析出させたいと思う。静かな決断の責任と希望を以て世に送り出した稚い子に命名する様に、萌芽にすぎぬ思想に負荷主義と冠するのも許されよう。これに拠って主要な先学諸説を理論的思想的に少しでも整理できるならば所期の目的は優に越える事になる。

第一篇、文化科学構造論は、歴史的（又は準歴史的）な社会現象の文化意義理解の手法定式化、第二篇、精神科学構造論は、（準）歴史的な社会的行為の精神的意味理解の手法定式化、第三篇、文化・精神・科学構造論は、意義理解と意味理解との手法連関構造の総括的定式化を行い、その上で文化人の思想解釈を試みたい。このため、

文化『科学論集』⁴⁾の他に禁欲的新教の取扱い方と研究態度を『宗教社会学論集』⁵⁾に見る。文化人とは、原近代人として禁欲的新教徒を想定し、これを歴史的また思想的前身として構成的に負荷しつつも全く独自の近代人として宗教性を脱皮した哲学的文化世界を構造的に負荷する禁欲的精神人であるとしておく。併し、カルヴィニズム、清教諸派の推移とその解釈の幅が広い様に文化人解釈の幅もある。ここでは敢えて中心的な限定規定として近代的歴史主義(者)を考えたい。

他ならぬ第二次大戦後の日本の桂冠思想と見られる近代主義が一方の主柱を彼ヴェーバーに立てた事は周知の事実である。併し現実科学的ヴェーバー解釈は1960年代に様相を変えた。人間の主体的自由が内的外的に最も昂揚した特定の歴史的事態であると理論的にも限定した局面をめざして近代化とする近代主義に立つ前近代批判と更にそこから重心を移した近代抜き超近代化に対する批判との系列と、近代自体とそこに孕む問題性の展開し尽し行く姿とに対する近代（及び近代主義）批判（勿論新たに解釈したヴェーバーの立場としたものに拠った）の系列に分岐し始めた。前近代批判にも、今日尚日本イデオロギーは不変の状況にあるから効力ありとする見解から、産業化日本では失効し行くがアジアでは産業化の前提となる文化的近代化に尚有効とする見解迄多様に展開された。前近代批判の有力な一統は初期近代「倫理と精神」に全幅の信頼を寄せ、問題は発期の主体から機構へ、理念から利害への転置にあると見なす。強いて二系列に整理しても尚近代概念のズレを帯びる錯綜は、時代現実の厳しさに対応したヴェーバー研究と近代主義の自己分解なのである。（この文脈の外側には、ハーヴァード的解

では近代の歴史主義とは何か。これに不可分の負荷構造とは何か。早急に規定を確定せずに熟すのを待ちたいのでこの間には本稿の全論述を充てる他はないが、象徴的には彼が教師観のドイツ型とアメリカ型をいずれ劣らず自分の立場と異なるというニュアンスで戯画化して示した事に表現される。これは、彼が内面的な『職業としての学問』を前提構造批判の方式で考え、時代の文化社釈とフランクフルトの解釈という紫外線と赤外線が加わる。) 会と連関しつつそれを独自に担う個人の(その様な現実性に関わり担う)人格の価値意識の明晰化に仕えたと結論した長い講演の一節に語られた。思うに彼は社会思想の二重の転回を遂行して一つの立場を構築したのである。一方ではドイツの文化社会とそれに密着した彼の生に及ぶ痛烈な自省に立って、ドイツ文化最良の遺産としての歴史主義に対して後進性と地方的偏狭を払拭し(しきったかどうか)、合理主義の精練を加えた。ここでの前近代とは伝統的経済行為、領主制を範型とする家長長制支配とその観念、ルター派の心情性と権威的従順という三つの伝統主義的複合を指す。(これは厳密には半近代の原型とでも言おうか。『倫理と精神』も「支配社会学」と共に)イデー批判に立つヴェーバー版『ドイツイデオロギー』批判としても完璧に近い。自己批判の痛切さは、父と国民共同体文化との広がり行く裂目と痛ましい決別やそれと同じ事情が自らの中で行われた事を指す。(これと負荷概念の関わりは論ずる事になる。) 合理主義的転回は現実ドイツへの状況発言からして強度に前面に出たが、惑ってはならない。即ち、他方では、世界の主導原理となりドイツも巻込まれて亜流版を造形する運命にある西欧近代文化の禁欲的合理主義を、その今日の特性と歴史的生成と展開の段階や分化変質の特性とについて検討し深刻な問題性を看取した。その運命的不可避と屹立する品位を認知し、歴史的相対化と局面限定を加えた上で自分の背柱として組込んだ。併しそれはバラ色の近代性等と言う訳にはいかない。明暗いずれも目的合理、形式合理の構造に凝集している。(これは負荷概念の一局面を成すことになる。『倫理と精神』は主に近代西欧イデーとイデオロギーの、即ち禁欲的合理性の批判として徹底的に完遂された。この様な二重の転回と共に歴史主義と禁欲的合理主義は一つの(負荷)構造へとセットされた。近代の歴史主義と文化科学の構造、この構造的文脈の上に、例えば諸々の価値自由の総合的な意味が完全に乗っているのである。

今、本稿が改めて文化人と近代を規定する⁹⁾意味は、上述の近代の現実と近代主義との錯綜に踏入って突破口

の造出をはかる試み、所謂近代主義批判をも含めた近代主義の思想と社会科学にもう一段の人間の成熟⁷⁾を追求して更なる力を与える試みの一步をしるす事である。これを文化科学の手法定式論議の作業から始めよう。⁸⁾

註

- 1) 不出来の責は専ら筆者に属すが、指導教授明記の許を得たい。第一に、佐原六郎名誉教授、第二に横山寧夫、石坂敏両教授。又、大学院の故石津照賢名誉教授、中井信彦、中鉢正美両教授に学恩を覚えるものである。
- 2) 例えば理念型と価値自由についても、その原理的意味規定の幾つかと、多様な局面への表出形態の意味規定の多くが複雑多岐に存立し又彼自身もその様に論述した。これを受けた解釈的研究は個々の正しい解釈の点や線があっても羅列並置の平面性なり不完全整理なりと混合して結局は面としての錯綜を積重ね易かった。これは多かれ少なかれ今後も避け難いものではあるが、解釈の妥当範囲を批判的に限定しつつ前進をはかる事はできる。
- 3) 遂に芽を出さずに終る危険なしとしないが、これが許されたのは、幼年にして行なった臆げな小さな決断から門を叩いた独立自尊の学府が持つ最良の伝統に違いない。緒方塾での勉強方式は今に伝えられている。
- 4) Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 3. Aufl., 1968, Tübingen (以下 WL と略記。)
- 5) Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. 1, 5. Aufl., 1963, Tübingen (以下 RSI と略記。)
- 6) この立場に最も近いのは、(勿論遙かに卓越している)折原浩のシャープな迫力ある学問と人間である。近いためかもしれないが、彼のマーゲナルマン理論は人間解釈での最高業績を提出したと見られる。そして負荷理論は若干異なるが重なる所の多いマーゲナル理論に敢えて異説を対立させて主張するのではなく、逆に協働を志す。基本的に殆んど同じ立場や志向を持つ者にして尚違った個性を持つ人間と学問の造形を、並んで、いや後から続いて共にしようとする。又、同じ程に近くそのためかもしれないが、最もオーソドクスな立場と見られるのが、(勿論遙かに卓越している)林道義の線の太い力強い、殊に社会解釈の方法と構想である。この歴史性の面に負荷説は重なり学ぶ所が多い。両側から叩かれるのがおちであろうが、(というのは、第三者に簡単に総合される様なものではない深い根拠を各々が持っている)二つの系列にとって各々新しい旗手となった二人の研究の(総合とは言わないが)調整を、(力の及ぶ限りで)漸次試みたい。それが、二者間の激しい論争(それ自体価値のある)を当事者の学問的意図に即しつつ一層の突りある研究発展に共働する事になると思われる。参照、林道義『ヴェーバー社会学の方法と構想』(岩波)1970。

- 7) 「成熟」は政治に限らず全ゆる局面でヴェーバーが自覚に追求した問題でもあり、直接的典拠を越えた把握は困難ではあるが、研究と解釈の真価が問われる所でもある。
- 8) 大作(量的なそれ)は本紀要に概ね向かないが例外的には許される余地もあろう。長編書き下ろしの都合で紙数の尽きた所で次送りとした。大部の残分は編集部にお預り願う他、当方で配布できる形にしておくので、申付あれば手交させて頂きたい。

II 歴史認識は、(第一)一定時点の歴史的に与えられた文化社会的な生活現実の個性的な様態(編成連関)の認定(第二)これに先行して歴史的に説明する¹⁾生成根拠の個性的な様態(生成連関)の追跡(第三)爾後のあり得べき個性的な進展の生成の様態(展成連関)の評定を主目標として営為し、(第四)以上の各々を認識する補助手段として準歴史的な要素と規則性の体系的理論的また経験的な認識を目標として営為する。²⁾ 第一を中心とした三つの構造連関の間の関係原理は歴史主義的であり、第四の連関によってこれら構造と関係を構成するのは合理主義的である。構造と構成の関係³⁾は明示し得る。歴史の流転の裡にあって、神秘性なしに知り得る諸々の要素は、それらの間の無限に可能な組み合わせと連関の個性的なあり方に於いて、それまでは知られる事のなかった唯一独自の様態を持つ一つの構造的連関に総合され得るのであり、時には全く他に抜き出た質の高さ豊かさ、人格では天才、事物では事業傑作を示し得る。⁴⁾ 四つの各連関とりわけ編成連関に於いて個性的な質はこの様な創出的発生の現出を本来的性格とする。ここにこそ、理念型は一般概念と個性概念の中間概念とする平明に過ぎる通説的解釈を越えた、理念型概念の第一の基礎的根拠があり、全ての理念型の多様な現われと展開が出發するのである。さて、これらの関係からして構成連関の定式が如何に精密かつ壮大に構築されようとも(主著『経済と社会』)、主目標に対する準歴史的な暫定補助手段の位置に変わらない。かつてのヴェーバーの方法論的論究の一半は多様な形態をとるこの関係とその侵害を巡るものであった。方法論的自然主義の勢力が種類と洗練の点で旧に倍する今日の学問状況には現実的意義を尚も持つものでもある。併しこの論争自体の問題は理解社会学者自身にとっては概ねわかりきった事であると同時に、自らの省察を深める余地もありそうである。新しい論争はせざるを得ないが、専らヴェーバー研究上薄明の裡にあって一層の明確な定式化を要する(と思われる)文脈を若干究明する訳である。

四つの連関の関係原理の上では、(第一)から(第四)

は認識目標の配列順位を表示するが、これと最狭義の歴史的因果科学の認識目標に(第二)の生成連関が専ら据えられ、(第一)の編成連関はその問題提起として据えられた上で前科学的な哲学的仕事と規定されることとは矛盾しない。但し、この仕事は準科学的認識と敢えて追加規定しておく。実に、主眼とされた生成と編成の関係は、最狭義の科学的認識目標を組み込む、より包括的な認識目的構造の上に成り立っているのである。即ち、現実科学は生の現実の個性的に生成仕上った(編成)連関の文化意義(歴史的個体)の特性と、「斯くなくて他とならなかった」⁵⁾根拠になる他の個性的現実(生成連関)の因果的意義の特性を理解しようとする⁶⁾が、この様に編成連関をより深く「具体的因果の中で意識せしめる」⁷⁾所に目的がある。これが文化科学の構造の基本文脈をなす。論理的に定式化すると、こうである。個性的にして普遍的 universell な具体的因果連関(生成連関と編成連関との連関)への整序(目標)の努力に於ける個性認識特有の論理的手段が拡大し行く内包と縮小し行く外延を持つ関係概念(構成連関)であり、その特有の論理的成果(結果=目的)が普遍的意義からなる個性的事物概念(編成連関)である。⁸⁾ 目的と目標の間の文脈の他に、関係概念の運動方向が自然主義のそれと逆であることが表現されている。この論理論的定式には更に別の定式が照応し連動する。「具体的現象の質的個性的な」様態の把握は現象の個性的結果に拠点を置かざるを得ずそこから遡及しつつ個性的原因の様態を推論判断する他はない。個性的な質の無限の多様に面しては、ひとまず多少とも確定性を持った「結果だけがかつての状況」と経過を教え得るのである。⁹⁾ 認識の目的論的営為構造の目的との照合にある結果の編成こそ全ての基盤である事を今の定式は更に裏打している。そして生起流転の一時的整序の性格は個性認識の宿命であり(価値でもあるが)、生成原因連関を究明した後にしても経験的に伝えられた諸々の事実は「あたかも」その様な生起と生成の「連関が存在していたかの様な状態にあるという」¹⁰⁾ 推論の見解を出ない。¹¹⁾ この不確実性は事実連関レベルでの(ひいては価値関係レベルでも)本質的意義を巡って介入する認識主観を排除すれば解決されるものではない。それは問題提起と認識目的の放棄である。本来、生起結果の編成連関そのものが現象の一時的整序でしかなく、生成連関の二層の不確実性の起点になっている訳である。¹²⁾

註

- 1) 説明概念にも二種あり、経験量的規則性に基く因果関係確認上の説明とそれによって確認された原因と

結果との質的意義理解上の説明とがあると推断しておく。「歴史的説明」は勿論後者であるが、前者をくりくち込んでみる。実証性と歴史主義性に関するこれ以上の論及は漸次行う。

- 2) vgl. WL S. 174, 175 参照, 富永・立野訳『社会科学方法論』(岩波文庫) 50, 51頁。(以下富永・立野訳と略記。)
- 3) 但し、構成体の語は構成の契機確保の意味から三つの構造体にも頻く用いられる。
- 4) vgl. WL S. 174, 175 参照, 富永・立野訳50頁。vgl. WL S. 33, 34, 101 Anm. 参照, 松井秀親訳『ロッシャーとクニース』(未来社) (一) 71頁 (二) 64頁註。(以下松井訳と略記。)
- 5) WL S. 171 富永・立野訳45頁。
- 6) vgl. WL S. 170, 171, 172, 173, 参照, 富永・立野訳44, 45, 47, 48頁。vgl. WL S. 14 参照, 松井訳 (一) 32頁。
- 7) WL S. 14 松井訳 (一) 32頁。
- 8) vgl. WL S. 5, 6 参照松井訳 (一) 15, 16, 17頁。
- 9) WL S. 114 Anm. 115 Anm. 松井訳 (二) 95頁。
- 10) WL S. 114 Anm. 松井訳 (二) 94, 95頁。
- 11) この虚構性は理念型概念の一つと客観的可能性に連なる。
- 12) この様な定式化論述のどこに本稿の固有性があるかを逐一指摘する訳にいかない。又個々の定式を提示するに至る根拠の説明も、同様に逐一付する余裕もない。ただ、誰でも取扱う素材からにせよ、旧態依然の論考ではない事を、確信するものである。尚、可成自由に用いる「発生的」の解釈説明は、いずれ行いたい。

III 論述の手順は、上に論定された文化科学の基本構造に即応して、まず問題提立部の歴史的個体の編成について、先に論理的個性主義と事実連関のレベルで、次に価値関係の文化意義のレベルで論定し、その上で問題解答部の生成原因追求に関わる事になる。精神科学は、生成原因追求の部の論理的な下位的特殊形態として別箇(第二篇)に論ずる。事実上雑にやりすごされるのが通例であるが、方法論議の全ての基は目的、問題提出(個性主義と価値関係)にある。全ては初めが難しい、とはここにも妥当する。

凡そ、歴史現象は素材、事実連関、意義に於いて無限の多様性を持つ。それにも拘らず四つの連関を可能な限り明瞭に定式化¹⁾して行こうとする所に、質的合理化としての歴史認識が成立する。研究と叙述の冒頭時点での歴史的個体は、「見透しが利かず理解が満足にできない個性的な多様状態にある具象的に与えられた」²⁾ 現実であり、多数の具体的現象を一時的に総括したにすぎず、多かれ少かれ漠然たる内包連関を持つにとどまる。歴史認識の不確実性の根底を見るわけであるが、方法論的自

然主義には思いもよらぬ(科学、論理、概念、経験の資格を否定するであろう)この事情は、やはり第一に個性認識の論理構造に基いている。外的事物界と内心界とを問わず全て個性的な質は「直近の類と種差によって定義されず」³⁾「相対的な不確定性を持つ」⁴⁾ 加えるに、所与(存在)の質的多様を一つの統一体である事物概念として選定的に凝集させる業は、全て直観と思维の混合である。直観的なものである事から単に相対的でしかない確実性を帯びざるを得ない。それだけではない。本質的意義というものは、対象の経験的所与を一つの極限迄徹底した個性的理念に関係づけて初めて一義的に意識される。⁵⁾ (理念型の原理に通じるこれは価値関係以前の事実連関レベルで既に存立するとしておく。) 経験的所与は意義構成体とは単に機能的な関係⁶⁾にあるにすぎない。⁷⁾ これで、意義構成に対する経験性、実証性を巡る論争の多くが的はずれとなる一つの理由がわかる。経験的事実とその編成に関わる多角的であり得る意義という二つのレベルが取り違えられた場合である。所で、質的認識とはその地盤の全局面を覆う不確実性の上であってその確実性を当該認識の目的が求める域迄相対的に高めようとする業である。即ち、この認識の目的は「かかる多様状態を個性的であるままに見透しの利くそれ故理解できる構成体」⁸⁾に合理化する事である。連関づけの(時には精密な)明瞭な定式化は質的合理性の世界にも存立する。無限に多様な歴史的現実から「経験的に得られる」⁹⁾ 諸事象を選別しつつ「組み込む 思维的に整序された 連関」¹⁰⁾ や「個性的思维構成体」¹¹⁾ は一つの理念又は二三¹²⁾ の理念複合として形成される。(「一つないし二三」が個性認識界にも論理的特徴として存立する。) 無限から多数、そして二三ないし一つの構造への凝集が質的合理化営為の中に遂行される。更に、連関が広汎である程、それの一つに総括するものは幾つも存立し得る。特定の綜合の特殊な一面性と作為性を名実共に表現する事、理念型の根拠はいよいよ確固たる姿を明らかに見せて来る。重点は、「経験的に確認し得」¹³⁾ れば足る素材、構成要素にあるのではなく、決定的にそれら要素の連関化と理念的統括にあるからである。¹⁴⁾ この様な質的合理化という目的は、当の初見状態にある歴史的個体から出発する因果的研究と叙述の経過の結末にして初めて確定的(勿論相対的)に概念的に定式化される。¹⁵⁾ 認識営為界でも目的は結果に於いて実現される。が漸次把握され行く経過を後で省く訳に行かない。¹⁶⁾ 経過の結果とする(或いはその意味で経過と結果と言う)所以である。因果的研究と叙述の経過は成果の表現や理解に不可欠の根拠を成して

おり、これは、専ら一義的に志向された認識目的とは別に認識の動機が目的と連携しつつ経過（手段に擬せられる）に作用して成果に深い刻印を与える事¹⁷⁾にも関わっている。研究（そして述叙）の経過（手段）は、認識対象の原因とは意味上（手段と原因の照合として）対応している。研究の経過とは勿論対象現実の原因追求であった。研究の出発時点にある疑問は、第一に、内包連関の漠然に発する。既知の普遍的又は一般的現実像を越えた個性的連関を認めた関心も、漠然より明晰を求めて第二に生成根拠への疑問に向う。個性は個性によって根拠付けられねばならない。既知の一般的な理由説明方法の限界に存立する個性的生成根拠が、或いは表面的な仮象的印象からする判断や通俗的論理によっては理解し得ない連関が確かにある。¹⁸⁾「法則的知識に矛盾する個別現象」¹⁹⁾に向う文化科学の歴史的関心そのものの個性主義（一般性の限界彼方に立つ）²⁰⁾は全く卒直に過ぎる程に徹底している。一般的な原因や条件、例えば世界史上どこにも見られる資本主義の一般的条件の存立は、特殊近代的資本主義の個性にとって単なる前提条件の一つにすぎない。むしろその一般的条件が僅かしか存在しない所であるにも拘らず特殊近代的個性を持つ条件の存立が決定的な原因として確定され得たのである。²¹⁾その時点迄の個性的並びに一般的認識（四つの認識目標）に習熟し、その限界点に生ずる疑問を研究の問題提立とすると、何と科学的である事か。準科学的と言い得て余りある。²²⁾

原因究明の重みに偏する問題設定を行う個性認識眼の（準）科学的力量的手にかかる限り、単なる漠然所ではないが、その様な、A. 初見的な歴史的個体の漠然たる見透しと理解を深める為に文化科学は、B. 原因研究に画定された生成根拠内部の見透しと理解を挺子とした。これは、それ自体別物乍ら精神科学に於ける行為の a. 初見的な直接的 Aktuell 理解と、b. 原動因的な説明的理解に照合する。つまり、認識者は、現実の意義理解に於いて直接的理解から動機的理解への跳躍を営為するのである。そして他方、行為の動機理解の本当の認識文脈がこの個性科学論からこそ、明らかにになって来るのである。この共通の生成と編成の関係も負荷構造の一契機を成すことになる。

個性認識一般の特殊な客観性に関わるのが普遍 Universell 概念である。各々の認識関心（ここでは歴史的個体の個性主義的事実連関のレベルで）の意義は序列を成して大小様々であり、一定人間群に概ね認容されても厳密には研究者毎に各様である。²³⁾そして、個性の最も主体的（主観的）な根底となる局面がここにある。こ

のことは因果研究の一方の極、経験的思维的妥当性に響くものではない。²⁴⁾併し、他方の極、意義の直観的思维的妥当（次のレベルの文化意義では思维的価値の妥当に接続する）に直接関わって来る。説明と理解、或いは説明二義の対照と同様に、文化科学的認識の客観性には二つの文脈が伏在するのである。歴史的因果科学の問題提立部では、専らその一方が問われる。歴史的個体は個性的でありながら「一つの多かれ少かれ普遍的な意義を要求する。」²⁵⁾但し、「事実あったもの」²⁶⁾の可能的意義としてである。それは、対象それ自体のために固有性の無時間的恒久永遠の（可能的）意義を要求する。²⁷⁾他の認識手段でも原因根拠でもない最高の認識目的とはこれを言う。そして他ならぬ認識主体の造形努力の目標もここに存立するのである。

註

- 1) vgl. RSI S. 29, 30 参照、梶山・大塚訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫）（上）36頁。（以下、梶山・大塚訳と略記。）
- 2) WL S. 14。松井訳（一）33頁。意識的にもみはくした。
- 3) RSI S. 30 梶山・大塚訳（上）38頁。
- 4) WL S. 119 松井訳（二）103頁。
- 5) vgl. WL S. 194, 195 参照、富永・立野訳78, 80頁。
- 6) vgl. WL S. 110 松井訳（二）83頁。
- 7) この関係の機能性は、給付担手論ないし負荷構造更にその禁欲的合理論に関わる事になる。機能主義社会理論の論考にも連なる。第二篇参照。
- 8) WL S. 14 松井訳（一）33頁。
- 9) vgl. RSI S. 30 参照、梶山・大塚訳（上）38頁。
- 10) WL S. 97 Anm. 松井訳（二）56頁註。vgl. WL S. 197 参照、富永・立野訳83頁。
- 11) WL S. 253 森岡弘通訳『文化科学の論理学の領域における批判的研究』（『歴史は科学か』みすず書房）157頁。（以下、森岡訳と略記。）
- 12) vgl. WL S. 191, 193, 197 参照、富永・立野訳73, 77, 83頁。
- 13) WL S. 142 松井訳（二）146頁。
- 14) この様な連関化の、（そして認識主観に担われた営為としての連関化の）人間的思想的根拠を探りあてるのはた易い。文化人を通り越して言えば原近代人（禁欲的新教徒）はバラバラの個別行為を「一定の生活体系」としての「必然的な連関」に服従せしめる様に「合理化」したのである。（がこうした局面の考察は後篇に属する。）RSI S. 113 梶山・大塚訳（下）63頁。vgl. WL S. 34 Anm. 参照、松井訳（一）73頁註。
- 15) vgl. RSI S. 30 梶山・大塚訳（上）38頁。
- 16) 仮に梶山・大塚訳『倫理と精神』の叙述の中間を省いたらどうなるかを考えれば首肯できるであろう。それは中味を抜くに等しい。

- 17) 動機、目的、手段の多角的連関については、後段の原因追求機制の項に論及する。
- 18) vgl. RSI S. 24参照、梶山・大塚訳(上) 25, 26頁。
- 19) WL S. 65, 66 松井訳(一) 136頁。
- 20) vgl. RSI S. 20, 21, 26 参照、梶山・大塚訳(上) 17, 18, 29頁。
- 21) 同じ論法が、例えば市民階級の一般的特性に反した(原)近代の英雄的行為にも用いられた。
- 22) 個性主義的関心を一般的知識からの距離から根拠づけるのは、抑制された副次的意味で行われる。主軸は、マニックに駆動し進行する目覚ましい要素化と法則化の激流に置きその取りこぼしを拾う所にあるのではなく(これを見誤ると方法論的自然主義にこの地点から流される)、現実の意義構造の見透しと理解を迫る歴史的そして準歴史的な新しい疑問、それ迄の意義連関付けの質的合理性を越える質の様態の見出し、これを主軸に不断の特殊な合理化が営まれるのである。
- 23) vgl. WL S. 183, 184 参照、富永・立野訳 63, 64頁。
- 24) vgl. WL S. 183, 184 参照、富永・立野訳 63, 64頁。
- 25) WL S. 253 森岡訳 156頁。
- 26) RSI S. 88 Anm. 梶山・大塚訳(下) 18頁註。
- 27) この「永遠性」は、文化科学と文化人及び禁欲の新教徒の思想を示唆する。その意味は後段に論及する。

IV ここで価値関係の文化意義のレベルそのものの論定に入る前に、事実連関レベルとの関係に若干立入る。意義付与された又、意義的に編成された事実連関(ひいては文化意義を付与される)には、「歴史的に確認し得る」¹⁾「経験的に与えられた生活事実」²⁾が(少なくとも素材として)含まれるが、その中には勿論人間行為とその動機や理想が含まれ得る。行為は不可欠でも唯一でもないが、中心的な素材であり得、又その場合が多い。例えば、現実の社会事象に大きな力を持った中世キリスト教の編成は「信条、教会法的並びに倫理的な規範、処世原則その他数知れぬ個々の連関の結合である。」³⁾文化科学者にとって、A. 経験的に確認し得る素材及び事実連関と、B. 文化意義との二層がある様に、認識対象としての行為者にとってa. 経験的に確認し得る事実連関とb. 精神的意味との二層がある。併し、この照合と共に、認識者にとっては、行為(者)の二層 a. b いずれも事実連関Aとして取扱ひ得るのである。同様の人間営為構造の照合性を強調しても、文化科学と精神科学、況んや認識主体と認識対象の行為主体と等置してはならない。視座とそこから照射される視界の局面構造の位置係に応じた転異が同一人間にとってさえ、存立するのである。これは思惟的論理的転質であって実質的それではない。

行為を含み得る事からも想起できる様に、理念に総括

された事実連関の現実像は動的作用連関を示し得る。つまり、現実の内在的な仕組みの解明を表現し得る。個々の事実連関、それらの間の作用的な事実連関等々は、一つのより包括的な事実連関様態に総括され、価値関係の理念的支配下に文化意義に編成される。有限現実に対する文化価値理念による支配(文化意義)、その下に服する直観的思惟の理念による支配(意義としての事実連関)、末端に経験的に確認され得る素材事実連関が支配の手にかかるものとして存立し、その背後には支配の及ばぬ現実無限界が見えつ隠れつする。文化科学(者)の営為構造解釈にも関わるが、支配の正当性と妥当性の問題は、ここ認識界にも存立する様である。⁴⁾文化社会認識の知的支配に於ける理念的正当性と経験的妥当性、この問題に、文化意義認識営為の意味が、そしてⅢ末尾の意義の普遍性や二つの客観性が関わっていると考えられる。それ故、このような、理念による支配重層構造を見れば、経験的事実連関レベルを実証主義的、理念のレベルを観念論的⁵⁾と言うのは、大雑把に過ぎるとも言えよう。即ち、二層関係の既に示したあり方こそ問題の核心なのである。「現実の個々の現象の連関とその文化意義の姿」⁶⁾という定式は、事実連関の個性的様態を認識的に(実質的にではなく)選定し造形する価値関係の主体の営為という契機を差狭んで受取るべきである。歴史的な個体と関心の統一性、唯一独自性・意義理解⁷⁾等々は、事実連関並びに個性論理レベルに既に基本的に存立すると論述して来たが、この完全な展開と指導的な根拠は、価値関係の局面に於ける統一性、独自性、文化意義理解等々にあると締括らねばならない。⁸⁾単なる素材選択にとどまらぬ「価値関係に基く素材の編成」⁹⁾という二層関係が如何に重要であるかは明白であるが、これは有力なヴェーバー批判の拠点の論点の一つがこの事情を巡っている事にも表われている。幅のある表現であるが、同一の具体的素材や現象に対しては、価値関係に応じた歴史的個体が価値関係の数に相応する数で存立することになる。これを何ともおかしいとする立場¹⁰⁾もあるが、何とも正しい洞察とする事ができる。事実連関の画定にせよ文化意義の画定にせよ問題の立方、視座視角と照射面の如何に応じて多様である。一般的であれ具体的であれ全てを尽す問題の立方がないのは、全てを尽す真理がないのと同じであろう。仮に素材の何であるかの認定が同一であるとしても、経験的に確認し得る(一つのあり方を確認するにすぎない)事実連関レベルにして既に素材の取扱は多様であり得る。意義(質)の契機がどこまでも貫通するからである。認識主観の理念的営様に担わ

れる一方(質)の契機と言てよい。驚くべき内在的理解力を示す為には実は全く決定的な点で外在的立場に立って外在的に克服したにすぎない事を見失うのが、パーソンズ T. Parsons のヴェーバー批判である。その手法は二重構成を持つ。一方では価値関係説を継承すると見えながらその歴史的と主体的な相対性と流動性を捨象し、この歴史主義性を骨抜きにした価値関係を最高傑作と自負する一つの凝固した一般構造的枠組みに値を付与する限りの具体性に矮小化する。そして事実連関に対する支配的意義を取り去って二層を切断し特に事実連関層を自立させ、単なる重合関係を残す。他方では、自己運動力を付けた事実連関と論理論レベルに本来の基盤として立場を構築する。事実連関の局面では、上の枠組の内容として行為システム理論を注入物として用意する。ここでは極めて柔軟な精密な念の入った造作ができ上る。文化科学の退化に精神科学の肥大が重なる。論理論の局面では歯止めを払った一般化と個性化を並置して文化科学と自然科学の論理的運動志向の差を消去する。(どちらも一般化と個性化を行うという平盤な理由では消去できないのであるが。)そして自らは、一般性の中に個性を位置づける。価値視点の凝結があるからこそ、自然主義的営為が存立する。行為分析に主観的契機を摂取しても、認識営為の自然主義を弁明する力はない。心理主義的に増幅された行為分析に対応して、認識観点の基軸が傲然たる現代アメリカ合理主義の自己肯定を驚くべき迫力をもって押しつけて来るのである。これは、喧伝される実証主義と観念論の総括ではなくて、観念論で装った全くの実証主義である。既に「弁証法を抜き去ったもぬけの殻」のヴェーバー解釈がパーソンズの進化論によって行れたという折原浩の指摘がある。¹¹⁾確かに文化科学には、近代化と歴史主義化の加工処理を得た弁証法(この語を尚用いるならば)があると考える。しかし、今は究極的な外在的立場の批判は留保して、内在的な理解についての誤りを訂す大でよい。事実連関と価値関係は克服希望者の言う¹²⁾様な全く切れた自律運動層ではない。本稿の論ずる所は、充実な意味での価値関係が事実連関編成を認識的に造形するのであってその逆ではないという事であった。事実連関レベルで諸要素複合が構成的特性の上を行く創出発生的特性を持つとはいえ、これが直ちに文化意義の創出的特性となる訳ではない。全く逆に、価値関係が照明する中で、事実連関内の諸々の創出発生的特性の中の特定のもの初めて認定されるのであり、更にこれが文化意義の理念への再編成的総合を受けるのであ

る。ここでは一点しか論じないが、この種の文化科学「克服」を一つ一つ転覆して行く展望は開かれた。それは文化科学者にとって自らの立場を発展させる限りで行えばよい。確かに偉大な一つの理論世界として特有の妥当領域を持ち、何分かの発展的造形を汲み取る事はできる。この様な彼方の立場が、ヴェーバーからの逆転性の色濃い展成形態としての実証主義的主体主義(主意主義)であるとすれば、我々は、現代的現実科学として、歴史主義的主体主義(負荷説)の方向に展開する志向を実現して行く者である。本稿の表題はここに基いている。

註

- 1) WL S. 196 富永・立野訳82頁。
- 2) WL S. 190 富永・立野訳73頁。
- 3) WL S. 197 富永・立野訳82,83頁。
- 4) 逆に、原版支配の正当性の位置付けもここから一層明確なものになるのではないか。
- 5) これらは各々、禁欲的合理主義の一系派と歴史主義とに重なる。
- 6) WL S. 170, 171 富永・立野訳44, 45頁。
- 7) ここでは一貫して、理解、解明、明証は、文化意義以前の事実連関と個性主義論理のレベルに意義の理解として基本的に存立すると考えている。
- 8) WL S. 101 Anm. 松井訳(二) 65頁註。
- 9) WL S. 86 松井訳(二) 34頁。
- 10) Talcott Parsons, The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to A Group of Recent European Writers, McGraw Hill, 1937 (The Free Press, 1949), p. 593, 594, 稲上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造』4, (木鐸社) 187, 188頁。(以下 SSA, 稲上・厚東訳と略記。)
- 11) 折原浩『危機における人間と学問』(未来社)1969, 395頁註(29) (以下『人間と学問』と略記。)
- 12) SSA p. 594 稲上・厚東訳188頁。

〔後記。紙数僅少に加えて最強の実証主義者との論争もあり、本号には第一篇の丁度前半のみ収まるにとどまった。第一篇V. 価値関係と文化意義理解、その価値自由、VI. 評価及び認識動機による価値関係(目的)索出の機制、その価値自由、模範型、価値関係の整合型、動機と目的の歴史主義と合理主義再論、VII. 原因追求論理、その価値自由、原因索出手段、認識動機との照応、認識目的との照応、原因追求の整合型問題、歴史と合理性、VIII. 第一篇文化科学構造小括。前提構造論とその価値自由及び負荷性。索出機制的 思想的意味と歴史的機能主義、以上が第一篇の後半の論考を成す。〕